

フィールドワーカーという運命

古賀正義（中央大学文学部教授）

大学で最初に出た演習のテキストがシカゴ学派のW.ウォーラーだったのが運命の糸なのか、教育困難高校や少年院などでのフィールドワークを始めて40年近くになる。困難を有する若者やその支援者にアンケート調査を実施することは難しく、問題事例に即して、対象者にコンタクトをとり、聞き取り・観察する質的調査の作業を地道に実践してきた。

近年では、底辺高校の卒業生90名ほどを、高校3年生時点から10年弱にわたってパネル調査した。もともとアポイントをとることから容易でなく、友人関係をたどりながら芋づる式に話を聞く作業を試み、最終年でも20名強のインタビューを行うことができた。

学校から職業へのトランジションと一口に言うけれど、それぞれのライフストーリーはじつに多様である。高校の成績や家庭階層などとあまり関連なく、町工場の工員、介護福祉職員、トラック運転手、デリヘル嬢、さらには経営関係の大学院生や渡米して留学幹旋業者になった者まで、その進路は想像を超える広がりである。ちょっとした他者との出会いや問題を抱える家族との関係などで、彼らの進路は大きく変わってしまう。格差・貧困といった紋切り型の言葉では説明しきれない、社会のダイナミズムが彼らの語りには内在している。

そのため、調査の手法も現実的にならざるをえない。調査謝礼の高低、実施場所・時間の柔軟な設定、記録・公表方法のコンセンサスなど、短時間のうちに、かつレコーダーの記録に残しつつ、調査を成立させていかねばならない。

この臨床的体験は、いろいろな調査に役立っている。東京都教育委員会と連携した高校中退者悉皆調査では、これまでの教師の機縁に頼る方法をやめ、独自に名簿を作成して高率のアンケート回収にたどり着くことができた。48名の抽出イン

タビューでも、従来のヤンキーな中退者イメージとは異なった、学習へのこだわりや家族危機の影響、医療機関へのアクセスなどを描き出すことができた（『高校中退者の排除と包摂』『教育社会学研究』96集，2015年）。

何校も中退を繰り返し20歳代前半になった女性の、自傷行為の体験と重ねつつ、支援環境（ケイバビリティ）の手詰まりと将来への液状不安を語っていた。「早く家を出たいなと思って。でも、普通の、高校終わってから行くバイトだとそんなに稼げないから、ガッツリ働いて稼いで。……つき合った人が、就職するってなって。あっ、私、中卒じゃいけないなって、（でも、私生活が揺れてくると）もう高校行くどころじゃなくなっちゃって、家に引きこもっちゃったりとか……」。

当事者の生の声は、切れ目ない支援の構築や学校のセーフティネット化にとっても欠かせない。排除はいきなり訪れるのではなく、相対的な剝奪の延長にあり、文脈を軽視したワンショットの調査では把握しきれない要素が多いからだ。構築主義の立場からいえば、問題をどのような情報・視点から定義づけるかで、処方箋は政治力学的に変わってしまう（『構築主義的エスノグラフィーによる学校臨床研究の可能性』『教育社会学研究』74集，2004年）。

海外でも、排除される若者への対応は緊急の課題である。アメリカのティーンコート（少年裁判）での軽度非行少年への市民性教育の試みや、スペインのプロジェクトオンブレによる薬物等依存者への社会復帰プログラムなども、近年実地調査している。その問題設定は共通しており、ここでも当事者の視点からの問題認識が重要だ。

今でも最初に出会ったテキストにあったエスノグラファーの言葉「教育の現場に本当の問いはある」は、私を惹きつけてやまない。

固定観念を崩す映画の効用

天野正子（元・お茶の水女子大学名誉教授／東京家政学院大学学長）

私自身、後期高齢者の1人だが、高齢の方に接すると、1人ひとり多様で個別的な問題を、高齢者「問題」あるいは高齢者「福祉対策」として丸めてとらえてよいのか、という問いを突きつけられる。

私ごとで恐縮だが、昨年の春、『〈老いがい〉の時代——日本映画に読む』（岩波新書）という本を書いた。日本映画の青春期ともいえる戦後民主主義の時代から、失われた20年を経て21世紀初頭までの映画64作品を取り上げ、人それぞれの生活史のなかでの老いとの出会い、一括りにされることを拒否する老いの自己表現を、〈老いがい〉として探りあてる試みをした本である。

驚いたのは、「タイトルの〈老いがい〉とは何？」「老ろうがいのこと？」という質問が少なくなかったことだ。この皮肉な読み違いは、今なお老いをめぐるイメージが否定的であることの証しなのだろう。

かつて作家の住井すゑが語っている。「人間、年をとることは自然なので、それが“老人問題”だと騒がれるのはよくよく世の中がゆがんでいるからです。多くの年寄りは、老人問題だと騒がれると、これ以上生きていて悪いのか、と」（増子忠道・太田貞司編『老いがよければすべてよし』大月書店、1987年）。「老いている状態」が高齢者「問題」や福祉「対策」にすりかえられるのは、こうしたイメージがあるからだろう。

いま、超高齢社会を迎え、官公庁をはじめ関連機関によって、独居老人問題、団塊世代の在宅福祉対策、高齢者所在不明問題、認知症対策など、高齢者「問題」に関する社会調査が精力的に実施されている。しかし、はじめから「問題」「対策」として取り組むのは、高齢者や老年の現実を見ずえる目を曇らせる危険性が大きいのではないか。社会調査が問題や対策という社会的規定から解放

されるためにも、私は映画のもつ効用を提案したい。

なぜ、映画なのか。文字資料（新聞、雑誌、書籍、ルポなど）では迫りえない「映像だからこそ」伝えられるものがあるからだ。映画は、第一に時代と社会を同時進行的に映し出すメディアであり、第二に映像のもつ非言語的コミュニケーションを通して、観る人により、多様にとらえられる世界である。社会調査が扱う「いま、社会はどうなっているか」について、内なる固定観念を修正するメディアとしても積極性をもっている。

79歳で初恋を成就した『ナビイの恋』（1999年）や、老女優が真夏の避暑地で出会った予想外の出来事と葛藤を描いた『午後の遺言状』（1995年）は、老年期を安定期ではなく、むしろ激しいアイデンティティの再編期としてとらえ直すことを可能にする。画一的な老年観や年齢規範への反省はそこから生まれる。

『トイレット』（2010年）や『博士の愛した数式』（2006年）は、老人との触れあいで深まる青年の人生の奥深さを描く。青年が、自分たちに先立つ老年世代が負担と犠牲を強いるという、マスコミがつくりだす高齢者「対策」にひそむ政治性に気づくきっかけがそこには秘められている。

高齢者「問題」だけではない。家族「問題」や若者「問題」など、社会調査によって「問題」の内実や「対策」の方向をとらえるには、調査する側に調査される側への豊かな想像力と、個人々へのきめ細かな対応がなければならない。映画はそのことを静かに説く。